

おき だいら みなみ
沖 平 南 遺 跡

2006年3月
長野県飯田市教育委員会

おき だいら みなみ
沖 平 南 遺 跡

2006年3月
長野県飯田市教育委員会

序

沖平南遺跡が位置する山本地区は、飯田市街地の南西部、木曽山脈の前山の麓に位置し、川沿いの平坦地こそ少ないが比較的広い耕地が広がっています。地区内には近年新聞報道等で話題となった旧石器時代の遺跡である「竹佐中原遺跡」「石子原遺跡」をはじめとして多くの埋蔵文化財があり、古の時代より人々が生活していた場所でもあります。

山本地区は、豊かな自然に囲まれた土地であります。近年では静岡県と長野県を結ぶ三遠南信自動車道建設工事等の大規模な開発工事が進んでおりその姿を変えつつあります。今次調査された場所もその関連工事の予定地であり、その一端を示しています。

しかし、このような変化の中でも文化財の保護という面も考えなければならず、時として相容れない事態に直面することがあります。それ故、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも止むを得ないことといえましょう。

今回の調査では弥生時代の住居址、中世の建物址等が発掘され、この土地の歴史の深さをあらためて証明しました。

文化財の保護と活用は、文化財行政の大きな課題です。幸い市民の皆さんのがんばりや地域学習の中で、自分たちの先人が残した文化財や地域の歴史を学びたいという欲求は大きくなっています。私たち文化財行政・教育行政に携わる者はこのような要望に応え、市民の皆さんにご理解をいただきながら、一体となった取り組みができるよう一層の努力をしていかなければなりません。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚いご理解とご協力を賜りました地元の皆様をはじめとする本調査に関係された全ての方々に深く感謝を申し上げます。

平成18年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊澤 宏爾

例　言

- 本書は、市道山本263号線建設に先立ち実施された、飯田市山本地区所在の埋蔵文化財包蔵地沖平南遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 調査は、飯田市建設部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 調査は、平成16年度に現地調査、平成17年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
- 現地での調査は下平博行・坂井勇雄が担当し、整理作業は坂井勇雄が担当した。
- 発掘調査及び整理作業にあたり、遺跡略号に地番を付しOKM767-1を用いた。また、遺構については以下の略号を使用している。
　豊穴住居址-SB　掘立柱建物址-ST　溝址-SD
- 本書の記載は、住居址・掘立柱建物址・溝址の順に記載してある。
- 土層の色調、土性については、小山正忠・竹原秀男 2005『新版標準土色帖』を用いている。
- 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、坂井勇雄が行った。
- 本書は坂井勇雄が執筆。編集し、馬場保之が校閲した。
- 調査にあたり、基準点測量をエムツークリエーションに委託した。
- 遺構写真は坂井勇雄が撮影し、遺物写真撮影は西大寺フォト 杉本和樹氏に委託した。
- 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004-1 飯田市考古資料館に保管している。

目　次

序	(2) 掘立柱建物址
例言	① 1号建物址 10
目次	② 2号建物址 10
第1章 経過	③ 3号建物址 10
第1節 調査に至るまでの経過 1	④ 4号建物址 10
第2節 調査の経過 1	(3) 溝址
第3節 調査組織 3	① 溝址01 10
第2章 遺跡の環境	② 溝址02 12
第1節 自然環境 5	(4) その他
第2節 歴史環境 5	① 泥炭原 12
第3章 調査結果	② 小柱穴 12
第1節 調査区の設定 9	第4章 まとめ 16
第2節 基本層序 9	写真図版
第3節 遺構・遺物	抄録
(1) 豊穴住居址	
① 1号住居址 9	

第1章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成15年6月17日付、15教文第235号にて長野県教育委員会教育長より平成16年度以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財の保護についての依頼があり、16年度以降に計画されている事業の照会がなされた。その結果、飯田市建設部国県関連事業課より飯田市山本における市道山本263号線の新設計画が提示された。計画路線上には埋蔵文化財包蔵地白山遺跡・沖遺跡・沖平南遺跡の3遺跡が存在するため、事前に予備調査を実施し、遺構・遺物の有無を確認することとなった。平成16年8月18日より白山遺跡から予備調査に着手し、重機によるトレンチ調査を行った。翌19日には沖平南遺跡、20日に沖遺跡の調査を行い、20日に全ての調査を終了した。

調査の結果、沖平南遺跡において弥生時代の竪穴住居址、中世の柱穴群等を検出し、予備調査終了後再度協議を行い、遺構が確認された部分に關し発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

第2節 調査の経過

以上の経過を経て、平成16年9月13日付で飯田市建設部と飯田市教育委員会との間で「平成16年度地方道路交付金事業 埋蔵文化財発掘調査業務委受託費負担協定書」を締結し、9月16日より現地での調査に着手した。重機による表土剥き作業、基準点設置作業を経て作業員による遺構検出、掘削作業等を行い、10月12日に現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において図面・写真類の整理、出土遺物の水洗・注記等の基礎的整理作業を行った。

平成17年度は遺物の復元・実測・トレース、遺構の第2原図作成・トレース等を行い、報告書作成を行った。

(1) 作業日誌

平成16年9月16日(木)～17(金) 重機による表土剥き作業

9月21日(火) 基準点設置作業・テント設営・作業員による調査開始

9月22日(水) 基準点設置作業・調査区南側検出作業

9月24日(金) SD01掘り下げ・写真撮影・小柱穴群検出

9月27日(月) 雨のため作業中止

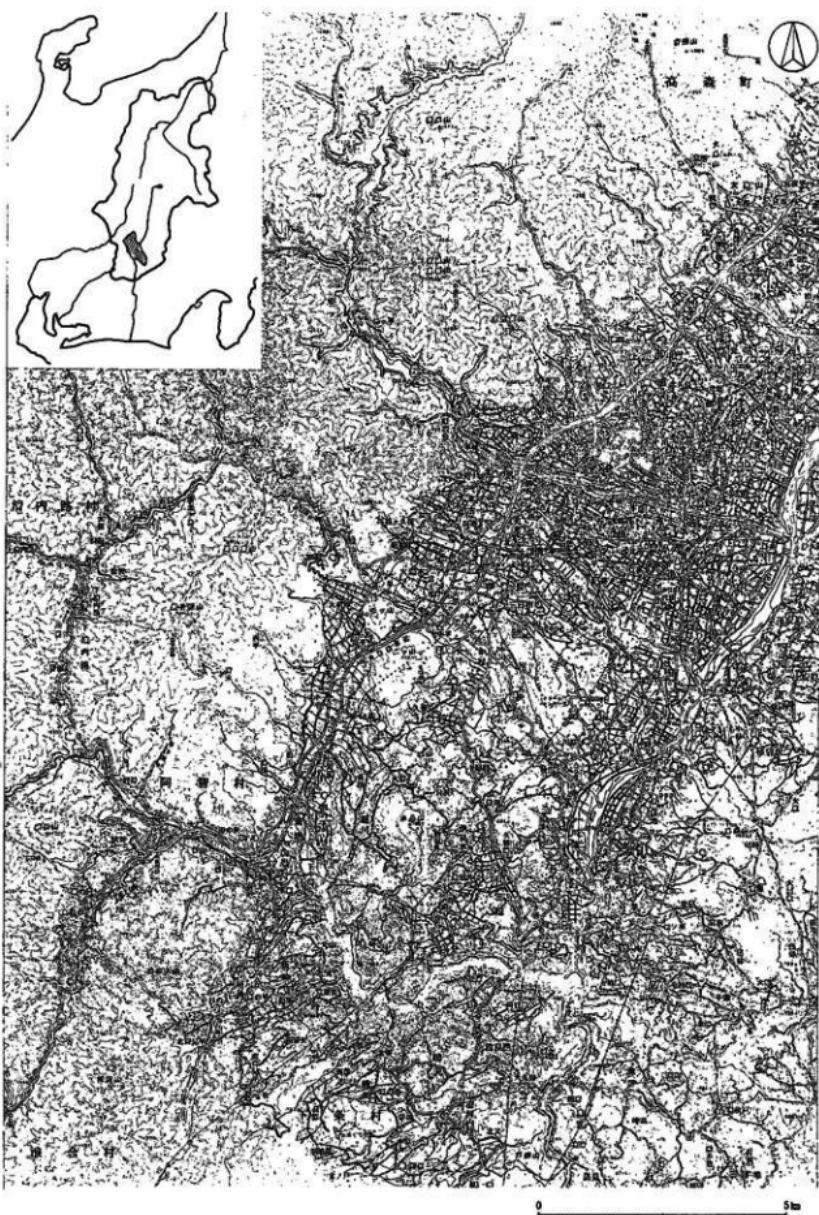
9月28日(火) 雨水排水作業・調査区北側検出作業

9月29日(水) 雨のため作業中止

9月30日(木) 雨水排水作業・SB01掘り下げ

10月1日(金) SB01写真撮影

10月4日(月) SB01掘下拡張・SD02掘り下げ、写真撮影・ST01写真撮影



挿図1 検査遺跡位置図

10月 5 日（火） 雨のため作業中止
10月 6 日（水） 調査区北側 黒色土帯掘り下げ・氾濫原一部掘り下げ
10月 7 日（木） 調査区北側柱穴群完掘・SB01埋甕炉の半戻及び写真撮影
10月 8 日（金） 雨のため作業中止
10月 9 日（土） 現地見学会を予定するが雨（台風22号）のため中止
10月12日（火） 雨水排水作業・SB01埋甕炉取上げ・調査区全景写真撮影
午後、道具搬出

第3節 調査組織

（1）調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田泰啓（～平成17年3月3日）
伊澤宏爾（平成17年3月4日～）
調査担当者 下平博行 坂井勇雄
調査員 佐々木嘉和（～平成16年度） 馬場保之 濵谷恵美子 羽生俊郎
現場作業員 伊藤孝人 小島康夫 杉山春樹 竹本常子 橋 千賀子 服部光男 松下省三
三浦照夫
整理作業員 金井照子 小平まなみ 中村地香子 横本宣子 福沢育子 松本恭子
宮内真理子 森藤美知子 吉川悦子

（2）事務局

飯田市教育委員会 教育次長 尾曾幹男（～平成16年度）
中井洋一（平成17年度～）
生涯学習課長 小林正春
文化財保護係長 吉川 豊（～平成16年度） 馬場保之（平成17年度～）
文化財保護係 宮澤貴子（平成17年度～） 濱谷恵美子
佐々木行博（～平成16年度） 下平博行 坂井勇雄
羽生俊郎（平成17年度～）



挿図 2 調査位置及び周辺遺跡図

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市は、伊那山脈と木曽山脈に挟まれた伊那盆地の南端に位置し、盆地の中央には天竜川が南流する。伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動によって成立した盆地や段丘によって構成された段丘地形であり、さらに山塊からの扇状地や天竜川の支流群の浸食によって形成された田切地形と呼称される河岸段丘とが組み合わさり、より複雑な地形を生み出している。

沖平南遺跡が所在する飯田市山本地区は、飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は飯田市伊賀良地区、東側は飯田市三穂地区に、南側は下伊那郡阿智村に接している。

山本地区は、西側を木曽山脈前山、東側を二ツ山・城山・水晶山に囲まれ、小盆地を形成している（阿智小盆地）。地区内では、木曽山脈前山から南流し阿知川に流れ出す湯川・箱川や、二ツ山と城山の間を抜けて天竜川に注ぐ久米川によって形成された扇状地が発達しているが、北側にある大明神原を除いては規模が大きくなっている。これらの扇状地は当初一続きの平坦な扇状地であったが、その後の浸食作用により開析・分断され、東西に長い丘陵を形成することとなった。

沖平南遺跡は、山本地区東部にあたり、現在山本小学校が存在する白山丘陵の先端部に位置する。北側で坊主川と隣接し、過去にはその氾濫の影響も受けている地域である。

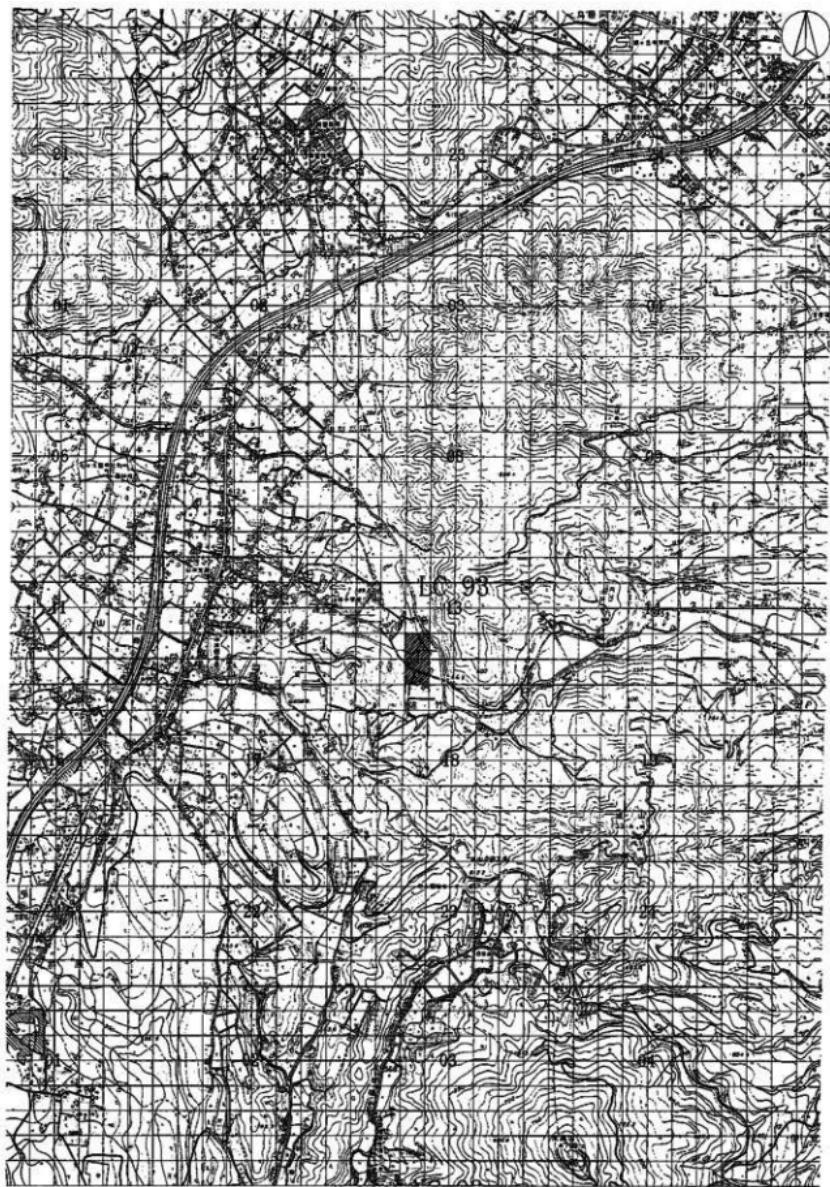
第2節 歴史環境

山本地区には埋蔵文化財包蔵地が広く分布しているが、これまで発掘調査された遺跡は市内の他の地域と比較して少ない。しかし、近年では長野県埋蔵文化財センターによる三遠南信道建設及びその関連工事に先立つ発掘調査が進められており、その様相が徐々に明らかにされてきている。

山本地区の遺跡は、古くは旧石器時代からその痕跡を見ることができる。昭和47年、中央自動車道西宮線建設に先立つ石子原遺跡の発掘調査において、ローム層中から石器群が確認され、前期旧石器を考えるにあたり全国的な注目を集めた。その報告書では、「前期旧石器時代末」という年代的な位置づけが与えられ、長野県内でも最古級の評価が与えられた。その後、平成12年度に長野県埋蔵文化財センターによる三遠南信道建設及びその関連工事に先立つ発掘調査で再び石子原遺跡が調査され、黒曜石製のナイフ形石器が確認された。また、平成13年度から同じく長野県埋蔵文化財センターによって竹佐中原遺跡の発掘調査が行われており、後期旧石器時代以前に遡る可能性がある石器群が確認されている。

折りしも「前・中期旧石器時代遺跡ねつ造事件」が社会的な関心事になっていたこともあり、再び全国的な注目を集めた。その他、周辺の遺跡からも該期の石器と思われるものが何点か出土しており、山本地区には、まだ該期の遺跡が存在する可能性が高い。

続く縄文時代については、石子原遺跡で昭和47年度と平成12年度の発掘調査で早期押型文土器の集落が確認されており、これが最も古い時代のものとなる。それに続き、白山遺跡・箱川原遺跡・湯川遺跡、



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置図

山本西平遺跡等から中期の堅穴住居址が確認されている。白山遺跡の調査は、昭和52年度に市立山本小学校建設に先立つ発掘調査として行われ、飯田下伊那地域では調査例が少ない中期中葉の集落址を確認した。特筆すべきものとして、2号堅穴住居址から装飾把手付深鉢が出土している。箱川原遺跡は、昭和45年、ミカレディ飯田工場建設中に遺物が出土し、調査の結果中期後葉の集落址を確認した。遺構からは、顔面付の釣手土器、有孔鉢付土器等が出土しており、現在工場内で展示・保管されている。その他、平成15年度に、三遠南信道建設に関連して長野県埋蔵文化財センターによる下り松遺跡の調査が行われ、中期後葉の堅穴住居址が調査されている。中期に続く後・晚期の遺構は明らかではなく、他地域と同様な様相を示す。

弥生時代については、前期・中期と後期では遺跡の立地が異なり、前者は天竜川に近い低位の段丘面を主な生活域としている。後者になると、高位の段丘面や扇状地に遺跡が拡大する。山本地区内ではこれまで断片的な遺物は採集されていたが、具体的な遺構は確認されていなかった。今回の沖平南遺跡の発掘で初めて後期の堅穴住居址が確認されたが、その他の地域においても該期の集落址の存在が予想される。

古墳は山本地区内で13基が確認されているが、円墳のみで現存するものは少なく、ほとんどが消滅している。古墳が密集している座光寺・上郷・松尾・竜丘地区に比べると著しく少なく、隣接する三穂地区と比べても少ない。発掘調査された古墳は、昭和47年度の中央自動車道建設に係る石子原古墳で、墳丘から4基の埋葬施設が検出され、出土遺物から6世紀初頭の年代が与えられている。こうした墓域を形成した集落の様相は不明であるが、地区内に存在したことは確実であり、その追求は今後の課題となる。調査された堅穴住居址は、高野遺跡の古墳時代前期に位置づくものが1軒のみである。

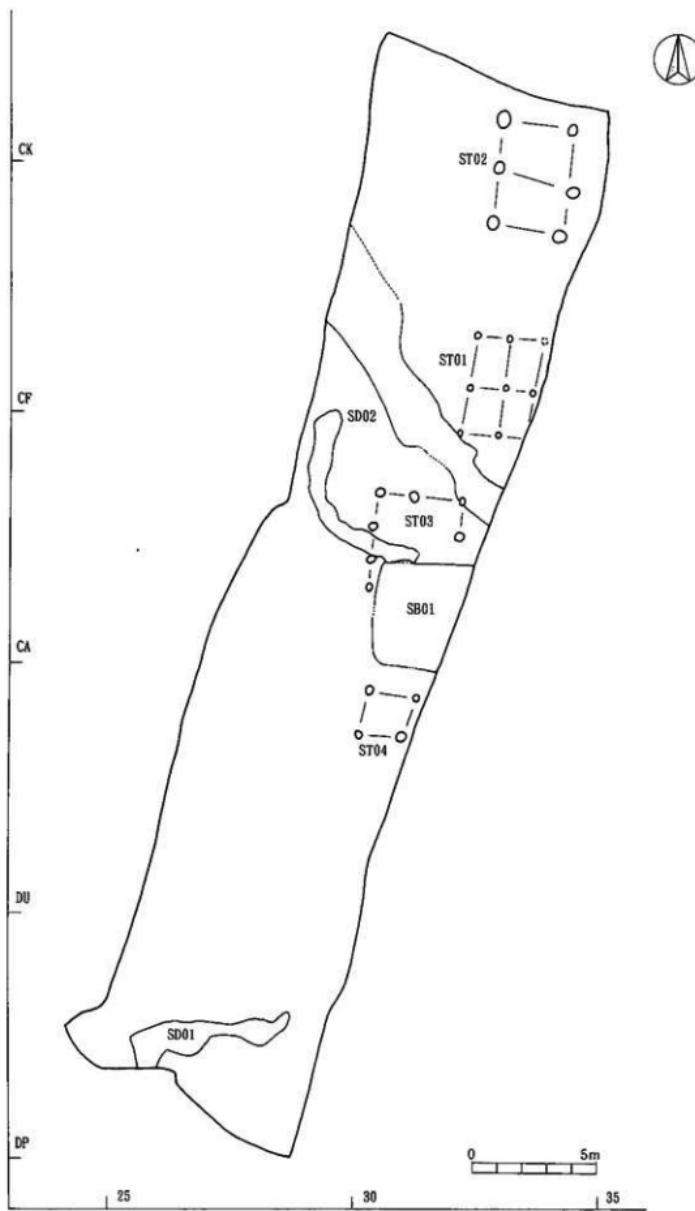
奈良時代については、伊賀良中村地籍にまたがる久米地区の高野遺跡から、その終末に位置づく堅穴住居址、掘立柱建物址、製鉄工房址が調査されている。これらは遺跡近くにある名刹光明寺との関連が考えられている。他には該期の遺構は調査されておらず不明な部分が多いが、隣接する阿智村からの経路を考慮すれば、古代東山道が通過していた可能性も考えられ、集落等の存在も予想される。

平安時代については、前述した光明寺の国指定重要文化財に指定されている薬師如来座像はその胎内に保延六年(1140)の銘を持っており、地区の平安時代の様相を具体的に示している。また、平成13年に長野県埋蔵文化財センターによって行われた竹佐中原遺跡の発掘調査では、該期の堅穴住居址が1軒確認されているが、奈良時代同様他には遺構が確認されていない。

中世の山本地域は、伊賀良庄に属していた。地頭は北条時政であり、地頭職はその後も一族である江馬北条家へ受け継がれていった。鎌倉幕府滅亡後は松尾小笠原家一族の支配下におかれ、城山に有事の際の山城として久米ヶ城が築かれ、山本東平の麦種城、西平の城山を支城としていた。普段は城山周辺に居住していたと思われるが、昭和27年、麓の箱川地区の箱川八幡社境内から多量の埋納錢が発見されたことは興味深い事実である。その他、山本大塚遺跡では該期の火葬墓群が確認されている。

近世になると、山本地区は幕府旗本の近藤家や、尾張藩の支藩である美濃高須藩の領地となり、それぞれ陣屋を構えていた。現在、近藤家、高須藩の陣屋跡は石垣のみが残り、当時の名残をとどめている。

今回の沖平南遺跡の調査では、山本地区内では初めてとなる弥生時代後期の堅穴住居址が確認され、その様相の一端が明らかになった。また、中世と思われる建物址群が確認され、該期の支配者層との関連が注目される結果となった。



挿図4 遺構分布図

第3章 調査結果

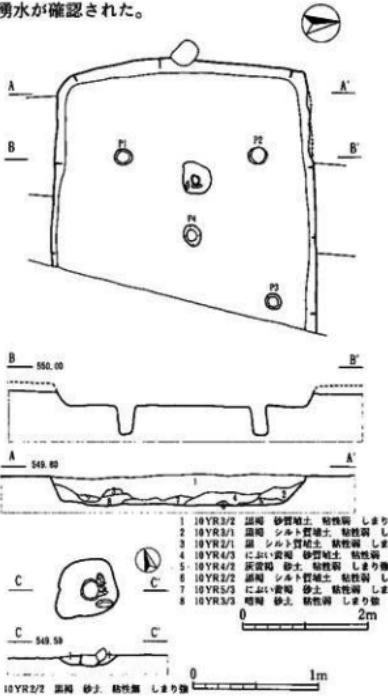
第1節 調査区の設定

調査区は、世界測地系に基づく新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図により設定した。

今次調査区はLC93 13-35・43に位置する。(挿図3)

第2節 基本層序

今次調査区における層位は、付近を流れる坊主川の氾濫堆積により部分的に異なるが、約40cmの耕土下で土壤化が進んだ黒色土層が見られ、その下層で砂質土層となり、ここを遺構検査面とした。南側では、黒色土層が約50cm以上確認される箇所もあり、予備調査ではこの層中より縄文時代の土器片が出土していた。よって、南側についてはこの黒色土層の上部を検査面とし、調査の過程で隨時掘り下げを行った。黒色土層の下層は砂混じりの礫層及び湧水が確認された。



第3節 遺構・遺物

(1) 竪穴住居址

① 1号住居址 (SB01 挿図5)

遺構 CB30を中心に検出した。東側の一部が調査区外の為全体の3分の2を調査した。

3号建物址・溝址02に切られている。平面形は4.2×(3.8)mの隅丸長方形を呈し、主軸はN82°Wを示す。検出面からの掘り込みは約46cmで比較的深く、やや緩やかに壁が立ち上がる。主柱穴は3基検出され、その他にP4が間仕切り穴となる。炉址は中央より西側に寄った場所に、底部を欠いた壺を埋めた土器埋設炉が設けられていた。

遺物 (挿図10) 遺物の出土は少なく、炉として使われた壺の他は、覆土中より壺・壺の小破片がみられる。

時期 遺物より弥生時代後期後半と考えられる。

挿図5 SB01

(2) 墓立柱建物址

① 1号建物址 (ST01 挿図6)

遺構 CE32を中心検出した。確認された規模は桁行2間、梁行2間であるが、東側が調査区外の為広がる可能性も考えられる。棟方向はN10°Eを示す。柱穴は柱間寸法が桁行で約1.9m、梁行で約1.3mを測り、直径約20cmの円形を呈する。

遺物 なし

時期 柱穴の形状より中世に比定される

② 2号建物址 (ST02 挿図6)

遺構 CI34を中心検出した。確認された規模は桁行2間、梁行1間であるが、北側が調査区外の為広がる可能性も考えられる。棟方向はN10°Eを示す。柱穴は柱間寸法が桁行で約2.0m、梁行で約1.8mを測り、直径約50cmの円形を呈する。

遺物 なし

時期 柱穴の形状より中世に比定される

③ 3号建物址 (ST03 挿図6)

遺構 CC31を中心検出した。確認された規模は桁行3間、梁行2間であるが、南側で遺構の切り合い等が見られ、不明な部分があり広がる可能性も考えられる。棟方向はN5°Eを示す。SB01・SD02を切る。柱穴は柱間寸法が桁行で約1.3m、梁行で約1.7mを測り、直径約30cmの円形を呈する。

遺物 なし

時期 周辺グリッドで盤・山茶碗が出土しており中世に比定される

④ 4号建物址 (ST04 挿図6)

遺構 DX30を中心検出した。確認された規模は桁行1間、梁行1間であるが、東側の調査区外へ広がる可能性も考えられる。棟方向はN10°Eを示す。柱穴は柱間寸法が桁行で約2.0m、梁行で約1.8mを測り、直径約25cmの円形を呈する。

遺物 なし

時期 周辺グリッドで山茶碗が出土しており中世に比定される

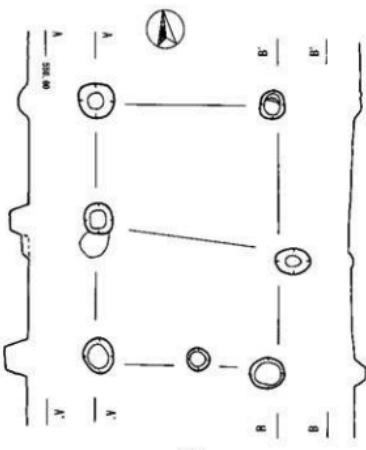
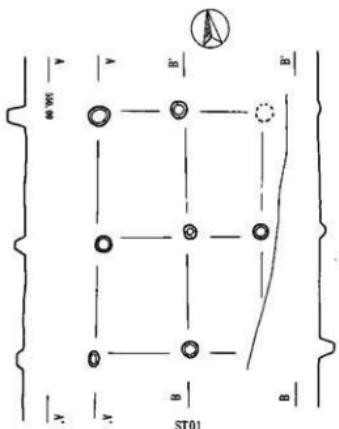
(3) 溝址

① 溝址01 (SD01 挿図7)

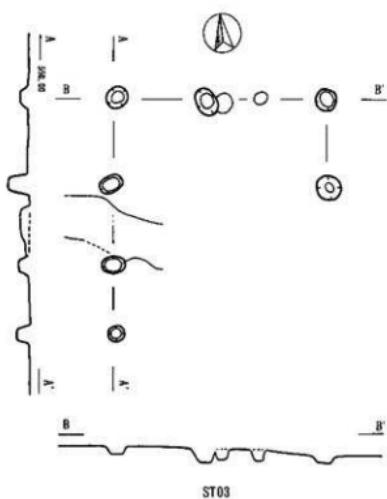
遺構 DR26を中心検出した。確認された規模は長さ7.3m、幅0.6~1.2m、深さ13cmを測り、南側は調査区外へ続いている。溝の覆土は全体的に砂質土で、自然流路と思われる。

遺物 (挿図10) 弥生時代後期土器片

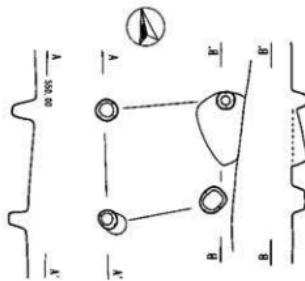
時期 不明



ST02



ST03



ST04

0 2m

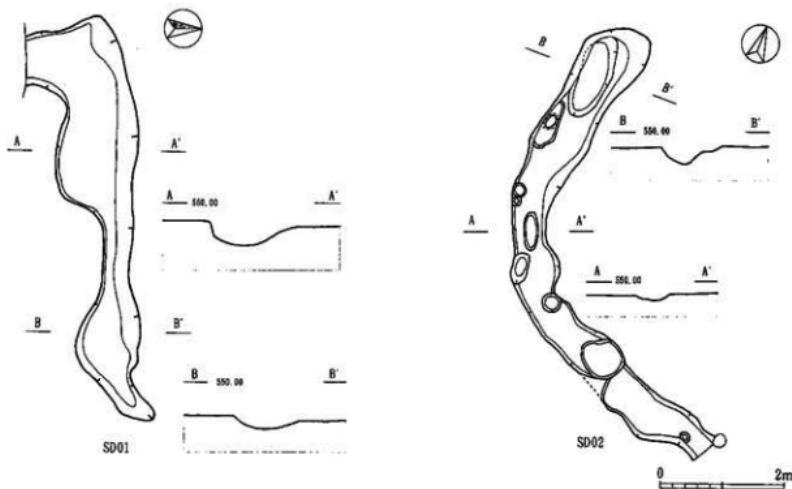
挿図 6 ST01・02・03・04

②溝址 02 (SD02 挿図 7)

遺構 CC31を中心検出した。確認された規模は長さ8.0m、幅0.5~1.1m、深さ12cmを測り、北から東へかけてL字状に続いている。SB01を切る。覆土中からは土師器や山茶碗等が出土しており、周辺に存在する掘立柱建物址と時期的に近接する。建物施設の可能性もある。

遺物(挿図10) 盤、山茶碗

時期 中世以降



挿図 7 SD01・02

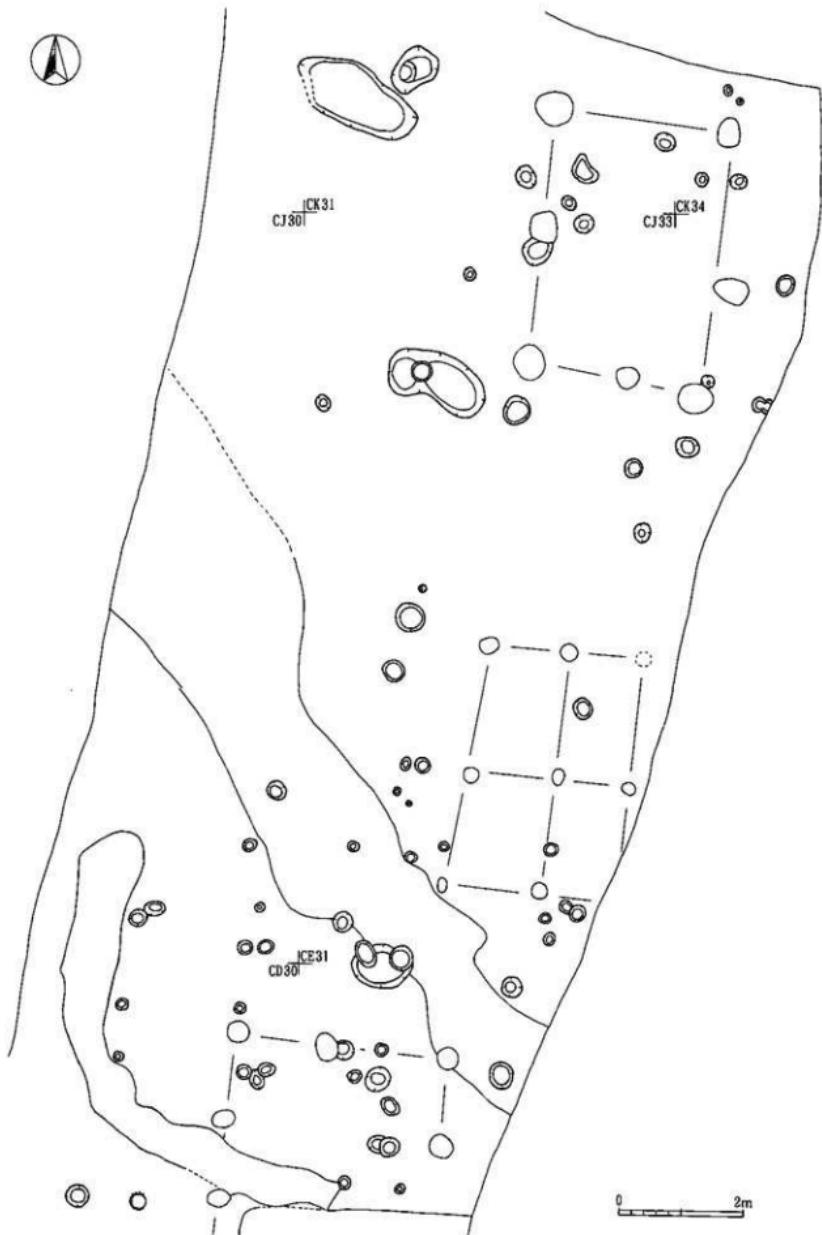
(4) その他

①氾濫原

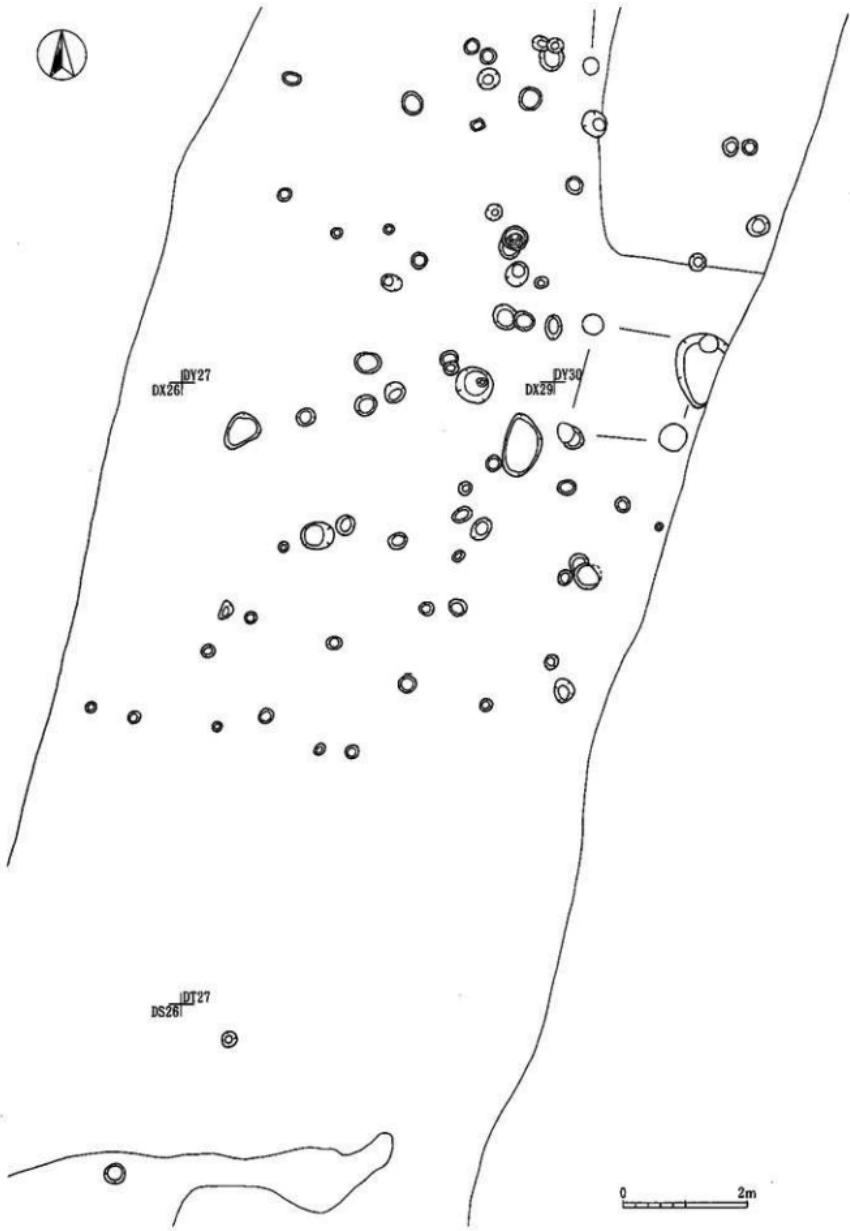
調査区北側では、広い範囲で大形の礫が検出され、一部の地点では、西から東にかけて筋状に礫が見られた。この礫間に多量の砂が見られ、縄文土器、古墳時代土師器片などが出土している。これらの礫や砂質土の状態から人工的というよりも自然流路もしくは土石流の痕跡である可能性が高く、調査区北側を流れる坊主川の氾濫に起因するものと推測される。また、これら流路の上面に中世と思われる掘立柱建物址の柱穴が掘り込まれていることを考えると、中世以前に発生した氾濫と思われる。

②小柱穴

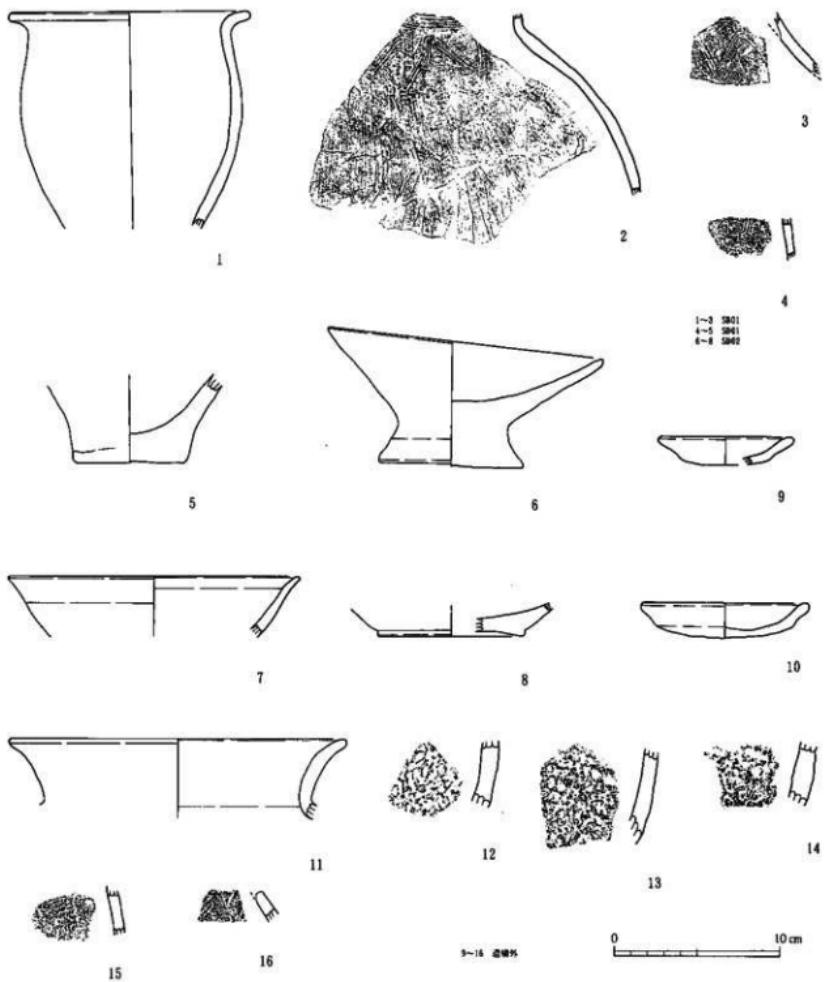
調査区全域にわたり、小柱穴が多数確認されている。いずれも中世の掘立柱建物址の柱穴と覆土が同一であることから、建物址を構成する柱穴の一部の可能性がある。



挿図 8 周辺ピット(1)



挿図9 周辺ピット(2)



挿図10 出土遺物

第4章 まとめ

第1節 繩文時代の様相

今回の調査では具体的な遺構は確認されなかったが、予備調査時に調査区南端部で少量の土器片が出土した。破片のため詳細は不明であるが、胎土に纖維を含み表面に大柄の縄文が施文されており、時期的には早期末から前期初頭に比定される。調査区外の西側に遺構が存在する可能性がある。

第2節 弥生時代の様相

今回の調査では、弥生時代後期後半の竪穴住居址が1軒確認されたが、その存在を確認したことは一つの成果であった。該期は弥生時代の中で最も集落数が増加する時期であり、飯田市全域で集落が確認されているが、この遺構は山本地区で初めて確認された弥生時代の竪穴住居址である。山本地区ではその存在が確実視されていながらこれまで断片的な資料の出土しか見られず、今回に至った。

調査された竪穴住居址は1軒のみであり、今回の調査結果で集落について論ずることは難しいが、1軒という点に意味があるように思われる。弥生時代後期という時期は、それまで天竜川流域など冲積地で集落を営んでいた人々が段丘の上段である洪積地帯へ集落を展開する時期である。そのため、上郷地区にある高松原遺跡や、座光寺地区にある中島遺跡のような拠点集落が各地に出現する。そして、その拠点集落の周辺に小規模な集落が営まれていく傾向にあるが、今回検出した竪穴住居址もその一つであると考えられる。調査区が限られるため区外に同様な遺構が存在する可能性もあるが、北側や南側では河川の氾濫が広い範囲で見られ、東側には久米川が流れている地形状況から集落の立地は今回竪穴住居址が確認されたわずかな微高地に限定され、その数は小規模であるように思える。また、遺構からは土器・石器の出土が極めて少なく、短期間の存続期間であることが推測される。周囲に広がる湿地帯を利用して水稻栽培を行ったものと思われるが、そこで生産が集落の維持まで至らなかつたのかもしれない。また、調査区外の西側についてはこれまで具体的な調査がされておらず不明であるが、該期の遺物が表探されており、同様な小規模集落が存在していた可能性があり、今後注意していかなければならない地点である。

その他、破片であるが中期末と思われる土器片が調査区北側の氾濫原から出土しており、西側に該期の遺構が存在する可能性も考えられる。

第3節 中世の様相

今回の調査では、該期のものと思われる1～4号建物址が確認されている。この他、調査区北側を中心に広い範囲で建物の柱穴と思われる小穴を多く検出しており、実際の建物址の数はさらに多いと思われる。今回建物址とした1～4号建物址は梁行・桁行ともその規模は様々であるが、棟方向がほぼ

一致しており、ほぼ同時期に複数の建物址が存在していた集落址と推測される。検出したこれらの建物址の性格について詳細に述べることは難しいが、1号建物址は東柱をもつ建物であったと推測され、この種の建物が周辺に多く存在していたと思われる。

これらの建物址の時期については、溝址02から出土した土師器の盤や山茶碗、遺構外ではあるが非クロト師器の所謂「かわらけ」等の出土よりおよそ12世紀から13世紀代の年代が推測される。この時期は、所謂鎌倉時代であり、山本地域は伊賀良庄の地頭である北条家、江馬北条家の領地であった。遺構・遺物が少ないため不明な点が多いが、この集落址は伊賀良庄に属する人々の村であったと思われる。

今回の調査では、弥生時代後期の堅穴住居址と中世の建物址を検出し、時期の断絶はあるが、この地に人々が集落を形成していたことが確認できた。道路建設に伴う限られた調査区であったためこれらが全容を示すものではないが、山本の歴史を考えるうえで大きな成果であった。河川の氾濫の痕跡が各所に見られ、必ずしも恵まれた環境とはいえないかったこの場所で集落が営まれていたことは当時の土地利用を考えるうえでも興味深く、今後の資料の増加を待ってさらに検討していく必要がある。

参考文献

- | | | |
|-----------|------|------------|
| 山本村誌編纂委員会 | 1957 | 『山本村誌』 |
| 飯田市教育委員会 | 1981 | 『白山遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 | 『高野遺跡』 |
| 郷土出版社 | 1996 | 『定本 伊那谷の城』 |
| 飯田市教育委員会 | 1997 | 『湯川遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 | 『山本西平遺跡』 |



遺跡遠景



調査前風景



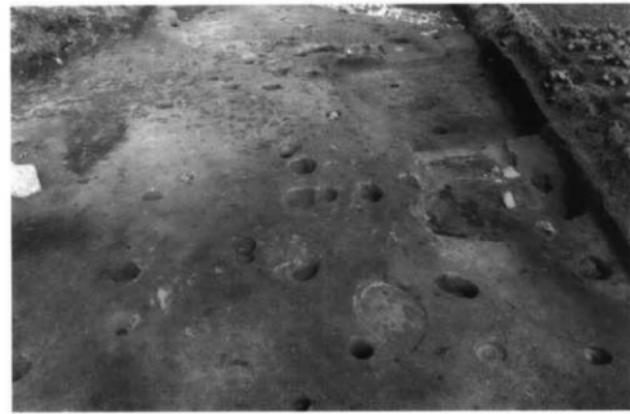
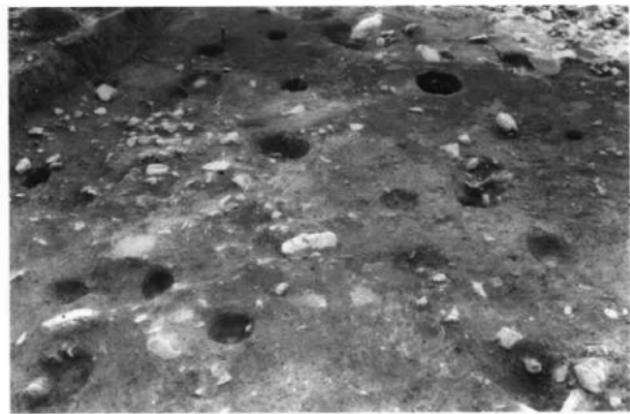
SB01



炉址



炉址断面



図版 4



SD01



SD02



氾濫原



氾濫原

図版 6



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）



重機作業風景



委託測量風景



作業風景



SB01 出土遺物



SD02 出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おきだいらみなみいせき						
書名	沖平南遺跡						
調書名							
卷次							
シリーズ名							
編著者名	坂井勇雄						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番 TEL 0265-22-4511						
発行年月日	西暦 2006年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
おきだいら みなみいせき 沖平南遺跡	いいだしやまもと 飯田市山本	20205	35° 27' 52"	137° 46' 33"	平成16年 9月16日 から 平成16年 10月12日	600 m ²	市道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
沖平南遺跡	集落址	弥生時代後期 中世 時期不明	竪穴住居址1軒 掘立柱建物址4棟 溝 壴 2 条	縄文土器 弥生土器 土師器	山本地區で初めて 確認された弥生時代 後期の竪穴住居址 中世の集落址		

沖平南遺跡

2006年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番

飯田市教育委員会

印 刷 有限会社 発光堂

